みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Coast Tsimshian in Canada : Current Status and Issues

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 笹間, 史子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001912

崎山編『消滅の危機に瀕した言語の研究の現状と課題』
国立民族学博物館調査報告　39:127-137(2003)

海岸ツィムシアン語の現状と問題点

笹間　史子

1 はじめに
2 話者について
3 教育
4 正書法
4.1 正書法のもつ問題点
4.2 正書法使用における問題点
5 おわりに

1 はじめに

海岸ツィムシアン語（Coast Tsimshian, Sm'algyax）はツィムシアン語族（Tsimshianic language family）に属する言語のひとつである。ツィムシアン語族の言語は，かつてサピアによりペヌーティ大語族に含められ（Sapir 1921, 1929），近年になってからもSilverstein（1979), DeLancey et al.（1988）等によりペヌーティ大語族との関連が問題にされてきたが，Tarpent（1997）を除けば十分なデータを用いた検討がなされておらず，また多くの死語を含むペヌーティ大語族自体がいまだ仮説の段階を出ないこともあり，この帰属については一般的な合意がみられるとは言いがたい。

ツィムシアン語族は，四つの言語からなる比較的まとまった語族である。ツィムシアン語族には，海岸ツィムシアン語に加え，その北部－北東部で話されるナス語（Nass）とギトクサン語（Gitksan)[1]，そして1970年代に「発見」された（Dunn 1979a）南ツィムシアン語（Southern Tsimshian）が属する。これら４言語は，海岸ツィムシアン語と南ツィムシアン語からなる「海岸語派（Maritime Branch)」と，ナス語とギトクサン語の「内陸語派（Interior Branch)」に分けられる（Tarpent 1997)。南ツィムシアン語は話者数が２，３人とも１人とも言われ，ツィムシアン語族の中で最も危機度の高い言語であるが，本稿では筆者が調査をおこなっている海岸ツィムシアン語に話を絞ることとする。

海岸ツィムシアン語はカナダのブリティッシュ・コロンビア州北西海岸を中心に，アメリカ合衆国アラスカ州南東端のアネット島でも話されている。海岸ツィムシアン語の話者がいる主な村には，カナダ側の（北から）ポート・シンプソン（Port Simpson，海岸ツィムシアン語でLax K'walaamsと呼ばれることが多い)，キトカトラ（Kitkatla)，筆者が調査をおこなっているハートレイ・ベイ（Hartley Bay)，そしてアラスカ側のメトラカトラ（Metlakatla)[2] がある。この他に，カナダ側の二つの町，プリンス・ルパー

ト（Prince Rupert）とテラス（Terrace）およびその周辺にも多くの話者が住んでいる。

2　話者について

海岸ツィムシアン語にはどのくらいの話者がいるのだろうか。ここではこの10年ほどの間の文献からいくつかの数字を引くことにしたい。Krauss（1994, 1997）は，500以下（カナダ側400以下，アラスカ側70）という推定数をあげている。この数字についてクラウスは，実際の調査に基づいたものではなく，推定にすぎないとしているが，1991年のカナダ国勢調査をもとにDrapeau（1998）があげているカナダ側の母語話者数（395）と，1990年のアメリカ合衆国国勢調査をもとにBroadwell（1995）があげているアメリカ側の話者数（113）は，クラウスの推定と近いものとなっている。一方で，Kinkade（1991）は海岸ツィムシアン語の話者数をこれらよりもずっと少ない200以下と推定している。現在の正確な話者数は不明だが，これらの国勢調査やクラウスの推定がなされてから何年もたっていることを考えると，500を大きく下回ることは確実であろう。

海岸ツィムシアン語の話者の多くは，現在60代後半以上である。英語への移行が強力におし進められたアラスカ側ではカナダ側以上に話者の高齢化が進んでいると言われ，現在では最も若い話者でも70歳くらいになると思われる（Krauss 1994, 1997参照）。カナダ側には，50代（まれに40代）の（ある程度）流暢な話者も存在するが，海岸ツィムシアン語を母語とし，それだけで自由に会話をこなすことのできる話者となると，もう少し上の年齢になるであろう。40〜50代の話者の場合，文法的な簡略化がみられたり，会話の最中につまったり，話題等により突然英語に切り替わったりすることがしばしばある。40年前にチェイフは「ツィムシアン語」（ナス語，ギトクサン語を含む）が全年齢層の話者を有すると述べたが（Chafe 1962），現在の最も若い話者の年齢を考えると，この頃が全世代が海岸ツィムシアン語を話した最後の時期であったと思われる。この後急速に進んだ言語交替には，海岸ツィムシアン語を母語とする親世代が，寄宿学校での辛い経験や経済的な理由から，自らの子供を英語で育てるようになったことが大きく関係しているであろう。

海岸ツィムシアン語は，60代後半以上の人々の間では日常会話の言語として用いられている。しかしながら，流暢な話者たちによる会話であっても，話者以外の人間（例えば英語を母語とするツィムシアンの若者やヨーロッパ系の人間）が１人でも加わると，話者が何人いようが瞬時に使用言語が英語に切り替わるのはよく観察されることである。ツィムシアンの村々に外部の人間が入る機会が増えるにしたがって，また話者の年齢が上がり，英語を母語とする若者が増加するにしたがって，海岸ツィムシアン語が使われる機会も少しずつ減少している。

3 教育

海岸ツィムシアン語の教育は，1970年代後半にさかのぼる（Mulder 1994）。ハートレイ・ベイの学校から始まった海岸ツィムシアン語のクラスは，まもなくポート・シンプソンとキトカトラの学校にも広げられた。ちょうどこの時期に，ダンによる辞書や文法が出版され（Dunn 1978, 1979b），以降，教師たちによって利用され続けている。これらの村での海岸ツィムシアン語教育はすでに20年以上にわたって続いており，現在も中学生くらいまでの村の子供たちが，短時間ではあるものの，毎日自分たちの言語を学んでいる。近年は美しい絵のついた対訳絵本等も出版され，教育の場で利用されるようになった。これらの村での授業はきわめて時間が短く，十分な会話能力をもつ生徒を生み出すには至っていないが，子供たちの親世代がほとんど海岸ツィムシアン語を話さなくなった今，毎日この言語に触れる意義は大きいと思われる。

さらに1997年からは，プリンス・ルパートの小中学校においても，海岸ツィムシアン語の授業を受けることが可能になった。プリンス・ルパートでの授業は毎日おこなわれているわけではなく，やはり新たな話者を生み出すことはおそらく望めないであろうが，それまで海岸ツィムシアン語の読み書きを習うことはもとより，それを耳にする機会もほとんどもたなかったプリンス・ルパート在住の子供たちに，この言語に触れる貴重な機会を提供している。

子供向けの学校教育に加え，近年，大人が海岸ツィムシアン語教育を受ける機会も増えている。これには，北ブリティッシュ・コロンビア大学の先住民言語クラスが各地で開かれるようになったことが大きい。北ブリティッシュ・コロンビア大学はプリンス・ジョージに本部をおく歴史の新しい大学であるが，プリンス・ルパートとテラスの分校で（常時ではないが）海岸ツィムシアン語，ナス語等のクラスを開講している。高校生くらいの若者から，自分たちの言語・文化に対する関心に目覚めた若い世代，幼い時代を海岸ツィムシアン語だけで過ごしながらその後自らの言語を失ってしまった年輩者，読み書きを覚えたいと願う話者，あるいは，娘や息子がツィムシアンと結婚したことなどをきっかけにツィムシアンの言語と文化に興味を抱いたツィムシアン以外の人まで，さまざまな受講生が通っている。

20年以上前に始まり，近年ますます力が入れられている海岸ツィムシアン語教育であるが，現在かかえている大きな問題は，流暢な母語話者であり，村々での学校教育が始まった頃からそれにかかわってきたベテランの教師たちが，60代後半から70代をむかえ，次々とその職を退いていることであろう。教育の場が広がったこともあり，必ずしも流暢に話せるわけではない教師が増えている。新しい教師たちは，日々勉強を続けながら，流暢な話者の助けをえて授業をすすめているが，今後，流暢な話者の高齢化がま

すます進む中でどのように教育をすすめていくべきか，検討していく必要があろう。

4　正書法

現在一般に用いられている正書法は，1970年代にダン（John A. Dunn）がツィムシアンの話者と共に考案したものである[3]。この正書法は，Hindle and Rigsby (1973) で用いられたギトクサン語の正書法をもとに，側面摩擦音を ɬ（ギトクサン語では hl），口蓋垂摩擦音を x（ギトクサン語では下線つきの x）[4] で表すなど，これに多少の変更を加えて作られている。1970年代の終わりに出版されたダンの辞書と文法書（Dunn 1978, 1979b）もこの正書法を用いて書かれている。

正書法は話者たちの間には必ずしも浸透しておらず，多くの話者はいまだに自分たちの言語を書き表す術を知らない。しかし，1970年代の終わりから始まった海岸ツィムシアン語の教育は，ダンの辞書と文法書を参考にしながら，この正書法を用いておこなわれてきた。

海岸ツィムシアン語の正書法は，基本的には音韻にもとづくものであるが，正書法自体に内在する問題点や，音声観察の不十分さ，さらに英語の影響を受けたと思われる綴りの出現等により，綴りと音韻が必ずしも対応しない状態が生まれている。以下，これらの問題点を，正書法のもつ問題と，その使用における問題とに分けて，見ていきたい。

問題点を見る前に，正書法のシステムについて簡単に説明しておく。正書法で用いられるアルファベットは a, b, d, e, g, h, i, k, l, m, n, o, p, s, t, u, w, x, y である。破擦音は，ts, dz のように２文字の組み合わせで表す。[p'] などの声門化破裂･破擦音は p' のようにアポストロフィを後置し[5]，[ʔm] などの声門化共鳴音は 'm のようにアポストロフィを前置する。下線は，子音なら口蓋垂音または音節主音的な共鳴音を[6]，母音なら後舌の [ɑ] または中舌の [ə] を表す（例えば k̲, n̲, a̲）。側面摩擦音は ɬ で表し，口蓋垂摩擦音は x で表す。声門閉鎖音はアポストロフィで表すが，語頭では表記しない。長母音は母音字を重ねて表し，ウムラウト記号は非円唇性を表す（ü, ẅ）。

4.1　正書法のもつ問題点

１）強勢をもたない短母音の表記

現在の正書法のもつ最も大きな問題点は，強勢をもたないシュワ的な短母音の表記である。海岸ツィムシアン語にはこの母音を含む接頭辞が多く，この母音の表記は多くの語の表記に関わってくる。例えば，「作る」を意味する接頭辞は，[sa] のようにも，[sə] のようにも，あるいは [si], [sɪ], [sɨ] のようにも発音され，正書法で sa-, si-, sü- と表記

されている。

この強勢をもたない短母音の問題は，新しい辞書プロジェクトを進めてきたステビンス（Stebbins 1999）によってもとりあげられている。ステビンスは，1997年にこの問題について筆者が「口蓋垂音と声門音の隣ではaを，yの前ではiを，その他の場合にはüを用いて表記するのがよいかもしれない」と述べたことに触れ，「aとiについては辞書のすべての綴りにあてはまるが，üが予測されながら，辞書委員会がaまたはiを選択した例も多い」としている。

この問題は二つに分けて考える必要があると思われる。形態音韻レベルと音韻レベルである。形態音韻レベルでは、これら環境により大きく発音を変える接頭辞は {ə} を含むと考えられる。この {ə} は，口蓋垂音または声門音に隣接すると /a/ に，yに先行すると[7] /i/ に，それ以外では /ə/ になる。/a/ はaで綴られ，/i/ はiで綴られる。

問題はこの後の音韻レベルである。/ə/ は音声的な実現の幅が大きい。[ə] くらいのこともあれば，もう少し広い [ɜ] あたりのことも，そして逆にかなり狭い [ɨ] くらいのこともある。多少前舌寄りのこともあれば，後舌寄りのこともある。そして，正書法はこの /ə/ に対応する文字をもたない。[ə] よりも少し広めと思われる時はaで，狭くて多少前よりと思われる時はiで，狭めで多少後舌ぎみと思われる時はüで表記されるが，[ə] またはそれよりやや狭めの時には，さまざまな綴りが見られることになる。発音は方言によっても個人によっても，また発話ごとにも，微妙に異なるものである。この正書法のシステムが続く限り，たとえひとつの綴りを選んで辞書に載せたとしても，/ə/ を含む語は複数の綴りをもちつづけるであろう。

加えて，ステビンスの指摘する，コミュニティによる綴りの違いという問題もある。ステビンスによれば，ハートレイ・ベイの話者はüを用いる傾向があり，キトカトラの話者はaを好む傾向があるという[8]。主としてハートレイ・ベイで調査をおこなった筆者がüを予測した箇所に，他のコミュニティ出身の辞書委員会メンバーが異なる綴りを選んだとしても不思議はない。

意味の違いに関係しない微妙な発音の違いを書き分けることは，学習者が辞書を引く際に困難をもたらす。また，同じ記号（例えばi）が二つの音（張唇の前舌狭母音である /i/ とそれよりもやや後ろ寄りかつ広めで発音される /ə/ のバリエーション）を表すのに用いられているということになると，当然どのように読むかという点でも混乱をひきおこすことになろう。

この問題は，/ə/ に対する新しい記号を作ってしまえば簡単に解決しそうに思われるが，正書法を大きく変えることには大きな抵抗感を抱く人も多い。しばらくは発音の観察に基づいた複数の綴りを併用していくしかなさそうである。

2）前舌と後舌のａ

正書法において，a は前舌の [a] を，下線つきの a̲ は後舌の [ɑ] を表すのに用いられている。前舌の a と後舌の a は，Mulder（1994）と Stebbins（1999）によっても別の音素として区別されている。ステビンスは，強勢をもたない音節では両者の区別は失われるとし，強勢をもつ場合のみに下線を使用することを提案している。しかし，Leer（1975）も指摘するように，強勢の有無にかかわらず，両者は対立しない。海岸ツィムシアン語にはひとつの短広母音音素しかなく，後舌の [ɑ] は基本的に口蓋垂音に隣接する位置で現れる[9]。したがって，後舌を表す下線は必ずしも必要ではない。とはいえ，学習者にとってはこの下線が正確な発音のガイドとなりうることを考えると，義務的でない補助記号として残すのが妥当かもしれない。

3）口蓋化

正書法においては口蓋化した kyi, gyi, k'yi と口蓋化していない ki, gi, k'i が区別されている。この区別は，Stebbins（1999）においても保たれている。ステビンスは，口蓋化した音と口蓋化していない音と交替可能なケースが多いとしつつも，話者による発音とそれに対する彼ら自身の直感に基づいてこの両者を区別している。実際の口蓋化の度合いは，語により，強勢により[10]，あるいは方言により，話者により，発話により，微妙に異なるが，筆者の観察から判断する限りでは，音韻的にはこの両者は対立せず，どちらも口蓋化した軟口蓋の音素を含むと考えられる。

「口蓋化」した綴りと「口蓋化していない」綴りの区別はおそらく必要なものではない。音韻に対応した綴りを用いるならば，kyi, gyi, k'yi に統一すべきであるかもしれない。とはいえ，すでに y を含む／ y を含まない綴りで定着してしまっている語がそれぞれいくつもあること，正書法のシステムを変えることには話者･学習者たちの抵抗があること，そしてこの問題に関しては，辞書を引く際の多少の手間を生むことはあるにせよ，学習者が間違った発音をする心配はいらないことから，これまで通り，両方の綴りを認めていくのが現実的かもしれない。

4.2　正書法使用における問題点

1）　母音の長短の区別

海岸ツィムシアン語の母音には長短の区別があり，すでに述べたように，両者は正書法で区別されている。長母音は母音字の重ね書きにより表される。例えば /a:/ は aa と表記される。しかしながら，長さが正しく表記されていない例は多い。

これはひとつには，Leer（1975）も指摘するように，長母音が強勢をもたない場合や声門化子音に後続された場合に短めに発音される傾向があり，時には短母音とほぼ同じ

長さにすらなるためである[11)]。

発音される母音の長さにあいまいな点がないにもかかわらず，発音と綴りが対応していない例もしばしば見られる。辞書に出ている別の方言の綴りを参照したことが原因となっていることが多いようである。「この語のここの音は長いけれど，綴りはoひとつだけでよいのだ。辞書にそう書いてあるから」などという言葉を聞くことがある。問題は，「発音」（正確には音韻）と綴りが対応すべきだという原則が完全に浸透していないことであろう。

2） 長母音の /aː/ と /eː/ の混同

長母音 /aː/ と /eː/ は対立しているが，前者は前舌の [aː ～ æː]，後者は広めの [ɛː] と近い位置で発音されるため，その区別には注意が必要である。[ɛː] を aa または a で綴っている例がしばしば見受けられる。例えば，[tχɛ́ːmsɨm]（固有名詞。物語に登場するトリックスター）を Txamsm とする綴りが一般に用いられている。この例はすぐ上の1）で述べた母音の長短の区別の問題をも含んでいることに注意されたい[12)]。

3） 英語の綴りの影響

近年，英語の綴りの影響を受けていると思われるものが見受けられる。ここでは二つの例をあげることにする。ひとつは [ɔː] を表す <u>oo</u> である。長母音の [ɔː] を表すには本来 oo だけでよいはずであるが，下線がつけられることがある。この下線は，oo が（英語の book のように）[ʊ] と発音されるのを避けるためにつけられているようである。

[ə] よりもわずかに後舌寄り，広めに発音される /a/ を u で綴る綴りも見られる。例えば [k'ə̱m] “me” を k'um と綴るような場合である。これにも cup, cut などの英語の綴りが影響していると思われる。

4） 補助記号の脱落

声門化を表すアポストロフィと口蓋垂音を表す下線の脱落がしばしば見られる。海岸ツィムシアン語の破裂・破擦音には，一般に “voiceless”, “voiced”, “hard” と呼ばれる三つの系列があり（例：p, b, p'）[13)]，“hard”（＝声門化）の系列をアポストロフィを用いて表している。下線は口蓋垂破裂音を軟口蓋破裂音と区別するために，k と g につけられる。補助記号が脱落している例：

da tsm gaył　　“in a dish”

この例の ts は声門化音，g は口蓋垂音であり，da ts'm <u>g</u>aył と綴るべきものである。補助記号の脱落は，声門化音と非声門化音，軟口蓋音と口蓋垂音の綴りを同じにしてしまう。

破裂・破擦音の３系列のうち“voiceless”の系列はあまり頻繁に現れないため，アポストロフィがおちているからといって別の意味にとられることはほとんどない。軟口蓋音と口蓋垂音の区別についても，多くのミニマル・ペアがあるわけではない。したがって，流暢な話者が読む場合ならば，問題の音が声門化音か否か，軟口蓋音か口蓋垂音か，判断することは困難ではないであろう。しかし，学習者にとって補助記号は重要な意味をもつ。

以上，４節では，正書法に関連する問題をとりあげ，正書法のもつ問題点，正書法使用における問題点に分けて見た。

近年，話者たちの中で，このままでは自分たちの言語がなくなってしまうという危機感が生まれ，どうにかして次世代に残していこうという動きが生まれている。しかし，言語保存活動に熱い思いを抱く人ほど，現在使われている正書法への思いも強く，正書法自体に大きな変更を加えることは現実的には難しい。また，書記法に大きな変更を加えることはこれまで読み書きを学んできた人々の間に混乱を招くことにもなる。

今後，正書法を少しでも使い勝手のよいものにしていくためには，教育の場で，海岸ツィムシアン語の綴りは海岸ツィムシアン語の発音（より正確には音韻）に基づくという原則を徹底させ，英語的な綴りや，補助記号の書き忘れに注意することが必要である。学習者は，辞書を引く前に，自分が耳にしている発音を注意深く観察し，母音の長短や，母音の音色の違いを聞き分けられるようになるまで，十分な練習を積むことが必要である。

5　おわりに

しばらく前に英語で自分たちの子供を育てた60代以上の世代が，最近になって自らの子どもを英語で育ててしまったことに対する後悔の念を口にするようになった。わずかではあるが，孫たちに自分たちのことば，そしてことば以外の文化を伝えようとする人たちが生まれている。学校教育にも力が注がれ，子どもにとってのみならず，大人にとっても，海岸ツィムシアン語を学ぶ機会が広がっている。ここまで危機度が高くなってしまった今，現在の学習者の中から流暢な話者がうまれる可能性はあったとしてもきわめてわずかであろうが，自分たちの言語，そして言語以外の文化を，積極的に学ぼうとする人は確実に増えてきている。

ほとんどの家庭が海岸ツィムシアン語継承の場としての機能を果たさなくなっている今，学校教育を確実に，効率よくおこなうことが重要である。そのためには正書法の問題は避けて通ることができない。現在の正書法における問題点を今後少しずつでも改善

していくことにより，正書法が海岸ツィムシアン語の学習者にとっても，話者たちにとっても，より使いやすいものとなっていくことを願う。

注

1）ナス語とギトクサン語は近い関係にあるため，比較的最近までそれぞれ「ナス・ギトクサン語」という一言語の方言として扱われてきた。この二つを別の言語と認めるに至った経緯についてはRigsby（1989）を参照のこと。

2）カナダ側にも同じ名のコミュニティがあるため，これと区別して一般に「ニュー・メトラカトラ」，「メトラカトラ・アラスカ」と呼ばれる。一方，カナダ側のメトラカトラは，「オールド・メトラカトラ」，「メトラカトラ・ＢＣ」，（ＢＣはブリティッシュ・コロンビアの略）と呼ばれる。

3）それ以前の書記法の概観については，Stebbins（1999）を参照のこと。

4）これは，ギトクサン語の口蓋垂摩擦音 x がより前部で発音される x と対立するのに対し，海岸ツィムシアン語にはそのような対立がないためである。

5）正書法が考案された当初は，口腔内の閉鎖と声門閉鎖とがほぼ同時に発音される時は 'k のようにアポストロフィを前置していたが，音韻的な対立があるわけではなく，次第に k'が用いられるようになってきた。

6）子音につけられた下線が二つの機能をもつことになるが，下線が口蓋垂音を表すのは k と g につけられた時だけであり，曖昧さが生じることはない。

7）「y に隣接すると」とすることができるかもしれないが，y に後続し y 以外の音に先行する例がみつかっていないため，ここでは「y に先行」としている。

8）Dunn（1978）は a を [ə] を表すのに用いたが，a が後舌の広母音を表すのにも用いられるため，a で [ə] を表すことは少なくなってきている。

9）/a/ の各異音の現れる条件については Sasama（1995）を参照のこと。

10）強勢をもつものは口蓋化が強く，一方，口蓋化が弱いものは強勢をもたないようである。

11）Stebbins（1999: 127）は，これとは逆に，本来短い母音が長めに発音される vowel lengthening にふれ，このために話者が母音の長さの判断に困ることがあると指摘している。筆者のこれまでの調査では，超分節素次第で母音がわずかに長くなることはあったものの，長母音と同じくらいまで長くなる例は観察していない。

12）[ɛː] を a で綴るのには，英語の綴り（例えば take など）の影響もあるかもしれない。

13）実際は，“voiceless”と“voiced”の区別は声帯振動の有無というよりはむしろ気息の有無によってなされている。

文　献

Broadwell, George A.

1995　1990 census figures for speakers of American Indian languages. *International Journal of American Linguistics*（> *IJAL*）61（1）, 145-149.

Chafe, Wallace L.

1962 Estimates regarding the present speakers of North American Indian languages. *IJAL* 28 (3), 162-171.

DeLancey, Scott, Carol Genetti, and Noel Rude

1988 Some Sahaptin-Klamath-Tsimshianic lexical sets. In William Shipley (ed.), *In honor of Mary Haas: From the Haas festival conference on native American linguistics*, pp.195-224. Berlin: Mouton de Gruyter.

Drapeau, Lynn

1998 Aboriginal languages: Cultural status. In John Edwards (ed.), *Language in Canada,* pp.144-159. Cambridge: Cambridge University Press.

Dunn, John. A.

1978 *A practical dictionary of the Coast Tsimshian language*. National Museum of Man, Mercury Series, Canadian Ethnology Service Paper 42. Ottawa: National Museums of Canada.

1979a Tsimshian internal relations reconsidered: Southern Tsimshian. In Barbara S. Efrat (ed.), *The Victoria conference on Northwestern languages*, pp.62-82. Heritage Record 4. Victoria: British Columbia Provincial Museum.

1979b *A reference grammar for the Coast Tsimshian language*. National Museum of Man, Mercury Series, Canadian Ethnology Service Paper 55. Ottawa: National Museums of Canada.

Hindle, Lonnie, and Bruce Rigsby

1973 A short practical dictionary of the Gitksan language. Reprinted from Northwest anthropological research notes, vol. 7, no. 1. Moscow.

Kinkade, M. Dale

1991 The decline of native languages in Canada. In Robert H. Robins and Eugenius M. Uhlenbeck (eds.), *Endangered languages*, pp.157-176. Oxford: Berg Publishers.

Krauss, Michael

1994 The indigenous languages of the North: A report on their present state. Fairbanks: Alaska Native Language Center.

1997 The indigenous languages of the North: A report on their present state. In Hiroshi Shoji and Juha Janhunen (eds.), *Northern minority languages: Problems of survival*. Senri Ethnological Studies 44, pp. 1-34. Osaka: National Museum of Ethnology.

Leer, Jeff

1975 Report on orthographical issues in Metlakatla Tsimshian. ms.

Mulder, Jean G.

1994 *Ergativity in Coast Tsimshian (Sm'algyax)*. University of California publications in linguistics, vol. 124. Berkeley: University of California Press.

Rigsby, Bruce

1989 A later view of Gitksan syntax. In Mary R. Key, and Henry M. Hoenigswald (eds.), *General and Amerindian ethnolinguistics: In remembrance of Stanley Newman*. pp.245-259. Berlin: Mouton de Gruyter.

Sapir, Edward

1921 A characteristic Penutian form of stem. *IJAL* 2: 58-67. [Reprinted in Victor Golla (ed.), *The collected works of Edward Sapir VI: American Indian languages* 2, pp.263-272. Berlin: Mouton de Gruyter. 1991].

1929 Central and North American languages. *Encyclopedia Britannica* (14th ed.), vol. 5, pp.138-141. [Reprinted in David G. Mandelbaum (ed.), *Selected writings in language, culture, and personality*, pp.169-178. Berkeley: University of California Press. 1949; Reprinted in William Bright (ed.), *The collected works of Edward Sapir V: American Indian languages* 1, pp.95-104. Berlin: Mouton de Gruyter. 1990].

Sasama, Fumiko

1995 *Coast Tsimshian plural formation with phonological introduction*. M.A. thesis, Hokkaido University.

Silverstein, Michael

1979 Penutian: An assessment. In Lyle Campbell, and Marianne Mithun (eds.), *The languages of Native America: Historical and comparative assessment*, pp.650-691. Austin: University of Texas Press.

Stebbins, Tonya N.

1999 *Issues in Sm'algyax (Coast Tsimshian) lexicography*. Ph.D. dissertation, The University of Melbourne.

Tarpent, Marie-Lucie.

1997 Tsimshian and Penutian: Problems, methods, results, and implications. *IJAL* 63 (1), 65-112.